

329 卵巣悪性胚細胞腫瘍に用いられる抗癌剤の Maus 原始卵胞およびラット顆粒膜細胞に対する毒性の検討

富山医薬大

脇 博樹、伏木 弘、新居 隆、泉 隆一

【目的】若年女性の悪性胚細胞腫瘍における抗癌化学療法に際しては、温存卵巣への毒性も考慮した有効適切な治療法の選択が望まれる。今回我々は、卵巣悪性胚細胞腫瘍に用いられる VAC、PVP、PEP の各療法を構成する抗癌剤とその多剤併用時の Maus 原始卵胞およびラット顆粒膜細胞に対する毒性について検討した。

【方法】① VAC、PVP、PEP に用いられる 7 種類の抗癌剤を Maus に、単剤投与では 1/5LD₅₀ 量の 1 回 i. p. 投与を、上記多剤併用投与ではヒトにおける 1 クールの一般的臨床投与量を体重当りに換算し、これを 1 週間隔で 3 回および 6 回 i. p. 投与して、原始卵胞数の遺残率を比較検討した。② Maus に Peplomycin を 1/5LD₅₀ i. p. 投与し、投与前および 10 週後、20 週後に PMS+hCG による排卵誘発を行って排卵される卵子数を比較して排卵能への障害を検討した。③ 顆粒膜細胞に対する障害性を検討するため PMS にて過排卵刺激した幼若ラットより顆粒膜細胞を回収、培養し、単剤 (8 種) および多剤 (VAC、PVB、PEP) を 24 時間連続接触後 MTT assay を行った。

【成績】① 原始卵胞遺残率は、単剤では CPM、CDDP、Peplomycin 投与後が低く、多剤では VAC は、PVP、PEP に比し低かった。② Peplomycin 投与後の排卵卵子数は、対照群に比し 10 週後で 19% に、20 週後で 21% に低下した。③ 顆粒膜細胞に対する障害性は、単剤では VP-16、CPM、CDDP、ACT-D が強く、多剤では PEP、VAC は、PVB に比し強かった。

【結論】 PVP (PVB) 療法は、原始卵胞および顆粒膜細胞に対する障害性が低く、よって卵巣に対する毒性が低いことが示唆された。

330 卵巣腫瘍スクリーニングとその follow-up 方法

都がん検診センター

秋山 稔、小田瑞恵、柳沢弥太郎、大村峯夫
劉 長青

【目的】従来の経膈超音波検査による卵巣腫瘍スクリーニングの報告は、検診対象や経済面を踏まえた有用性に関しての言及は少ない。本研究では卵巣腫瘍スクリーニングを行い検診対象や follow-up の方法および経済面からの検討を行った。

【方法】1990 年 10 月-1991 年 12 月の 15 ヶ月間に当施設と関連大学病院との共同で経膈超音波検査・内診による一次検診と CT・CA125 値による二次検診を行い、10294 例に対し卵巣腫瘍をスクリーニングした。また 2 年間の追跡調査を行った。【成績】一次検診で 372 例の付属器腫瘍を発見し、二次検診で 340 例が卵巣腫瘍と診断された。340 例中直径 6 cm 以上または CA125 値異常の 115 例は手術を行い、85 例で組織診断が確定した (良性 78 例、境界悪性 3 例、癌 3 例 (Ia 期 1 例、Ic 期 2 例)、体癌転移 1 例)。残り 225 例は follow-up し 203 例で追跡できた。腫瘍径は 31 例で 1.2 倍以上になり 36 例は不変で 136 例は縮小した。縮小した 136 例中 88 例 (64.7%) は 6 か月以内に縮小した。腫瘍径増大・腫瘍存続例では CA19-9 高値例が多く認められた ($p=0.005$, χ^2 検定)。追跡できた 304 例中 66 例 (21.7%) で家系 (三親等以内) に癌 (子宮 23 例、消化器 17 例、乳房 13 例) の既往があった。304 例中閉経後の 69 例は、閉経前例と比べ腫瘍径増大・腫瘍存続例が多く認められた ($p=0.024$, χ^2 検定)。経済面からみると卵巣癌を発見する経費は ¥19,441,935、手術適応の卵巣腫瘍を発見する経費は ¥560,825 であった。【結論】経済面を考慮し、閉経後の癌家系を対象を絞って検診を行い、CA125 値と CA19-9 値を指標として follow-up 期間を 6 か月間隔とすれば、この方法は手術適応の卵巣腫瘍をスクリーニングするためには有用であると思われた。